

巻頭言

1970年に創設された日本福音主義神学会は創設40年という節目を迎えた。学会誌の特集号を組むにあたって、40年を一区切りとして、その歴史を振り返るのか、活動を総括するのか、現状を分析するのか、あるいはこれからの展望を描くのか、編集委員たちは様々に議論した。その結果、創設以来、福音主義神学会に深くコミットし、この学究的交わりを育ててくださった先輩の方々に執筆をお願いすることにした。

創設期のビジョンとエネルギー、本学会にあって活動された40年の個人的な足跡、変わらずに抱いてこられた問題意識、あるいは今後の展望など、先輩から直接に伺ってみたいという編集委員の願いは、他の学会員も共有しておられると思う。それは福音主義神学の原則や神学会の運営に関わることもかもしれない、自らが40年間取り組んでこられた研究テーマかもしれない。それらを、本学会創設の頃を知らない者たちのために、福音主義神学会の将来を担う者たちのために、「メッセージとして語っていただきたい」という願いが形を成したのが本号である。

それ故、学会誌が通常用いる論文形式ではなく、多分に講演的、エッセー的に書いていただいた。8名の執筆者の文章は、五十音順に掲載している。さらに特集テーマとは別に、2本の投稿論文、水草修治氏による「『神のかたち』であるキリスト」、宮崎誉氏の「ヨハネ福音書の第一過越物語（2-4章）の集中構造的解釈」を掲載できたことは感謝である。

今年、学会誌の掲載を中心に展開してきた本学会のウェブ・サイトを一新した。その働きを担われた安黒務氏が「デジタル時代の『福音主義神学会』公式サイト」を執筆してくださったことも、今後の福音主義神学会の活動のあり方を探る上で、また学会誌という神学会の遺産を活用する際に大いに参考になる。

以下に、編集委員の一人として諸氏の文章に触れ、「福音主義神学会」が日

本の教会と神学のために果たしてきた役割がどのようなものであったのか、個人的に抱いた所感を記すことにする。巻頭言で諸論文の所感を記すことは、ましてやそれが私のような若輩の手によるものであれば、きわめてふさわしくないのでであろうことは自覚している。だが、40周年記念号をここに発行することができた恵みを主に感謝するためにも、何らかの総括がなされてしかるべき、との思いをお許しいただきたい。

1. 研究者・牧師の交わり

1969年、日本プロテスタント聖書信仰同盟(JPC)に属する6名によって設立の呼びかけが始まり、翌1970年に設立総会が開催された。横山氏の論文は、発足から遡って、1956年のグラハム大会、1959年の大阪クリスチャン・クルセード、1967年のグラハム大会などの大集會が、「戦後、個々ばらばらに日本宣教を始めた福音派の各教派・教団が日本人伝道という共通使命のもとに協力・協働する働きを通して、巧まずして相互理解という尊い宝を共有するよう導かれた」と、伝道への意欲が福音主義神学会を胎動させる力となったことを伝えられている。

福音主義神学会が戦後日本の教会の流れの中で設立された経緯は、村瀬氏・横山氏の論文に触れられている。鍋谷氏の論文には総会のプログラムや初期の役員構成や規約も載せられている。読者の興味をそそるのは、設立に関わった方々の口から直接、その様子や当時の澆刺とした情熱が今に伝えられ、また教派を越えた交わりと協力を懐かしみ、感謝の口調で語られていることである。主にある交わりがこの学会を形成し、やがてこの学会が新たな交わりを生み出し、それらが諸氏の研究生涯を導いていった様子が語られている。したがって、これらの論文には人名が多く登場する。

設立総会当時、若手の一人であった宮村氏は、自らの牧会人生をたどりながら、主の摂理のうちに伝道者・牧会者・研究者・研究者に出会ったことを記している。このように、福音主義神学会が単に学究・研鑽の場ではなく、時に牧師・神学校教師を慰め励ます場となり、時に日本の教会と神学を導く指標を提示していたと、諸論文が述懐していることは、本学会の特質を物語る。

安村氏の論文には、1982年に中部部会が西部部会から独立して発足したこと

や、中部部会が東海聖書神学塾の発足の道筋となったことが記されているが、その後の活動に登場する多くの人物を見ても、やはり、この学究的な交わりが日本における宣教協力の役割を果たしていたことは明らかである。

これからも福音主義神学会は、日本の教会の神学と宣教にとって同様な役割を果たしていくことが期待されている。鍋谷氏が「40才で創設にかかわり、今、80才になった」と前書きし、最後は「40代の若い方々の背中を見ながら、一歩でも進んでいきたい」と閉じることで、今後交わりのサイクルが前へ後へへ進展していくことを期待されているが、これは諸論文に共通した先輩方の願いであろう。

2. 福音主義神学

宇田氏が、論文タイトルを「ポストストラクト（あと書き）」としていることは、氏の研究生涯にとっても、また福音主義神学会にとっても意義深いことと思う。『総説現代福音主義神学』という大著を頂点として、米国や日本で発表された多くの論文・研究書をもって、本学会がコミットしている「福音主義」とは何かを説き明かしてこられた氏が、そのポストストラクトに何を記されるかは、本学会の将来にとっても意味のあることである。

氏は、ブッシュ政権の政治政策にからんでマスコミが取りざたしてきた「キリスト教原理主義」が、きわめて浅薄な「ファンダメンタリズム」理解に基づいていることを、主に二人の日本人の著作を相手に批判している。つまり、福音主義をただの信仰運動であるかのごとくに批判する現代神学に対して、福音主義神学の豊かな主張を明確に述べようとするなら、マスコミレベルで取り上げられる「ファンダメンタリズム叩き」に対しても、歴史的・神学的裏付けをもって同様の主張を展開すべきである、ということであろう。今ひとつのポストストラクトは、バルト研究についてである。1990年代に米国福音派でバルトと向き合って活発化していった「新福音主義」の流れと対話できる態勢、あるいは日本の「エキュメニカル派」が関心を寄せてきた現代神学（バルト、ブルンナー、ブルトマン、ティリッヒ、ニーバー、モルトマン、パネンベルク）と対話できる態勢が、福音主義神学会に育っているのかという懸念がある。氏は自身の研究成果を簡潔に記した上で、それを後代の福音主義神学研究の課題と

して手渡しているのが、この「ポストスクリプト」であろう。

丸山氏は、歴史神学の根源的な課題に焦点を絞られた。これまで、福音主義信仰に立つ者による歴史研究は多くあっても、福音主義神学が「歴史」を、「歴史神学」をどう捉えるべきかについては、ほとんど検討されこなかったのではないかと。氏はこの課題を積み残すのではなく、啓示性と史実性との間で揺れてきた近代神学を超越して、福音主義神学がその聖書理解・神学に則って、「歴史」をどう捉え、「歴史神学」をどう構築すべきか、その方向性・原則を明確に打ち出しておられる。それは、40年の区切りを迎えた学会にとって、貴重な提言と言わざるを得ない。

3. 福音主義神学会のあり方・方向づけ

湊氏は福音主義神学会40年に直接関わる内容ではなく、新渡戸稲造に関する正統的論文を寄稿された。氏が、東京基督教大学から、新渡戸稲造が初代学長を務めた東京女子大学の学長職に招かれ、それをもって研究分野の一つに現代日本の教育を加えられた成果がここにある。氏自身は一貫して福音主義でありながら、より広い地平に立ち、日本社会の切実な課題を前にしたとき、自由主義や実存主義などの近代神学思想との対峙をもって形成されてきた福音主義神学を越え、新渡戸稲造という原点的キリスト者の生涯と思想に日本の教育が抱える諸課題の突破口を見いだされた。これは、福音主義神学会が40年の歴史の中で視野を広げてきた一つの成果であり、また湊氏が現代日本の宣教に資するにふさわしい学会のあり方・方向性をここに提示されていると考えるべきであろう。

村瀬氏は、JPCの働きに貢献され、福音主義神学会の創設に深く関わりつつ、「現代の神学状況にふさわしい新鮮な聖書信仰の理解」を追求された軌跡を述懐している。クルマン、リダボス、F.F.ブルース、プロムリー、バルトを通して、「適度な批評的な問題」を取り扱うことのできる「聖書信仰」を目指しながらも、1980年代になって「米国発の無誤性の主張を柱とする聖書論争」の大波がJPCや日本福音主義同盟(JEA)や福音主義神学会にも波及したため、その大波と苦闘せざるを得なかった、その心境を包み隠さず記されている。当時、ベルカウワー、あるいは先に述べたリダボス、ブルースらの書物が邦訳さ

れていたら、事情は異なっていたであろうと。限られた見識で学会の枠を規定してはならないとの指摘は、心しなければならぬ。

安村氏の論文の後半には、東方正教を専門に研究する立場から、近代精神・プロテスタンティズムに内包された個人性・合理性への反省とともに、靈性を重んじる統合的神学の方向性が打ち出されている。中部を中心に開かれた全国研究会議(2005)のテーマが「靈性」であったことを振り返ると、福音主義神学会が検討すべき反省課題、それを打開する方向性がすでに検討されていることに力強さを覚える。

40年の間に福音主義神学会に深く関わった諸氏の中には、すでに天に召された方々もおられる。40年の間につき込まれた情熱と信仰と知力とは、これから先の40年においても学会を支え、鼓舞してくれることであろう。

「伝統とは、死者の生ける信仰であり、伝統主義とは生ける者の死者の死せる信仰である」(Varoslav Pelican, *The Vindication of Tradition*, Yale University Press, p. 65)。

主イエスが執筆された先輩方の健康を大いに祝してくださり、日本福音主義神学会のためにこれからも貴く用いてくださることを祈りつつ。

編集委員・藤本 満